

91 誌上発表 西鶴作品にみる身体に関する語(三)

計良 吉則

群馬県前橋市

『本朝二十不孝』大本五巻五冊は貞享三(一六八六)年に刊行された。本作品は中国の『二十四孝』や藤井懶斎による『本朝孝子伝』などを意識した西鶴流のパロディーであり、批判精神を根底として、さまざまな親不孝者がリアリティーをもって描かれている。『本朝二十不孝』は西鶴の自主的なテーマではなく、板元の要請にこたえたテーマとされるが、その発想には西鶴の独自性がみられ、庶民を題材に話を展開するところが斬新といえる。

本作品の中の身体に関する語に着目し、それについて調査することは、当時の人びとの身体観を知るうえで意味のあることと考えた。

まず、全身を表すものの中では「身」という語が圧倒的に多く、95か所みられた。「身を見ぐるしうなし」「身を凌ぐ衣」「身を恨み」「身も果てん」「身をたすかりて」のように用いられている。また「骨」も7か所みられ、「骨の節々までも」「胴骨を踏みたたき」のように用いられている。

次に、頭部においては「首」が4か所で、「首筋」のように用いられ、「頭」は3か所で「頭から嚙り喰らふ」のように用いられている。

軀幹では「腰」が多く、12か所あり、「御腰をかけられ」「腰ぬけ」のように用いられ、また「腹」も多く、9か所みられ、「脇腹をさし通せば」「腹掻き割いて」のように用いられている。

四肢の中では「手・指」が極めて多く、61か所みられた。「手を打ち振って」「うれしき片手に」「手先に力なくて」「指をさせど」「指先から」のように用いられている。また「足・脚」も比較的多く、14か所みられた。「足たたずして」「足すくみ」「手足ふるはせければ」のように用いられている。

五孔では「眼・目」が最も多く、38か所みられた。「御目にかくる」「見出す眼に」「目の見えぬ」「眼(まなこ)ひかりて」のように用いられている。次に「口」が多く、28か所みられ、「口を揃へ」「口をあかすに」のように用いられ、また「耳」「鼻」は「耳ちかく」「鼻の高き事」のように用いられている。

分泌物等では「涙・泪」が多く、24か所みられ、「みなみな涙になりて」「泪に袖蓑を浸し」のように用いられ、「血」は1か所あり、「血筋引き」と用いられている。また、「息・気」が多く、18か所あり「諸息かよひ出」「息出しの不自由さ」のように用いられていた。

これらの数値を頻度の観点から、前回調査した『西鶴諸国ばなし』と比較すると、共通点がいくつかある。具体的には、全身を表すものの中で「身」という語が断然多い点、四肢の中で「手・指」がやはり断然多い点、五孔の中で「眼・目」が最も多い点、分泌物等の中で「涙・泪」が最も多い点である。さらに、「脈」という語については、『西国諸国ばなし』においてすでに生命徴候や病気の診断として用いられていたが、『本朝二十不孝』においては「庭なる碓のうへに、あられなくあたりて、息絶え、脈に頼みなく、当座に露と消えしを……」とあるように、呼吸と脈拍の停止とが人の死の判断基準であったことがうかがえる。

また、『本朝二十不孝』の中で、安産を期して「ことになれたるばばを雇ひ、腹帯のしめ加減、庭ばたらきに、身をこなし、腰をすこしもひやさず、目通りより高く、手をあげさせず、寝姿も足を伸ばさず、かしらは関枕にてとどめ、身をかたむるに残る所なく、食物をもあらため、……」のような工夫をしていたことは、現代にも通用するものと思われる。